日賜和歌題二首云々、同日可被講廻風情早可初參云々、仍不擇吉凶件夜付籍了、御所高倉殿翌日御會、東向御所月卿兩三、雲客數十講云々、

〔出觀集雜〕おなじ御とき條○ニ内裏にてかひあはせあるべしときこえけるに、ある人のうたを申ければ、

もゝしきの玉の臺の簾貝あしやがうらに波やかけゝん

雲の上にちりぞまがへる春風の吹あげの濱の梅の花かひ

〔山家集下雜〕内條○ニに貝あはせせむとせさせ給けるに、人にかはりて、

風たゝで波をおさむるうら〳〵に小貝をむれてひろふ也けり

なにはがた玄ほひにむれて出たゝむ玄らすのさきのこ貝ひろいに

風吹ば花咲波のおるたびに櫻貝よるみしま江のうら

波あらふ衣のうらの袖がひをみぎはに風のたゝみをくかな

なみかくる吹上の濱の箔貝風もぞおろすいそにひろはん

玄ほそむるますをのこ貝ひろふとて色の濱とは云にや有らん

波よするたけのとまりのすゞめ貝うれしきよにもあひにける哉

波よする玄らゝの濱のからす貝ひろひやすくもおもほゆる哉

かひありな君が御袖におほはれて心にあはぬことしなき世は略○中

伊せのふたみのうらに、さるやうなるめのわらはどものあつまりて、わざとのことゝおぼしく、はまぐりをとりあつめけるを、いふかひなきあま人こそあらめ、うたてきことなりと申ければ、かひあはせに京よりひとの申させ給たれば、えりつゝとるなりと申けるに、

今ぞしるふたみのうらのはまぐりをかひあはせとておほふ也けり